

# チェルノブイリ通信

2006年1月20日

No. 66

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内  
TEL・FAX 093-203-5282

E-mail jimur@cher9.to

URL <http://www.cher9.to/>

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



ベラルーシに広がる大地。遙か遠くまで、森と湖が続いていく。

\* 第5回プレスト甲状腺検診報告

\* 清水一雄医師からの報告  
検診活動の成果と変化

\* チェルノブイリと日本の若者たち  
自分にできることを探して

\* 臨床検査技師、村瀬幸宏さんの報告  
現地で診断結果を出すことの意味

\* アルツール医師へのインタビュー  
8年間の検診活動を振り返って

\* チェルノブイリ支援運動・九州  
第25次調査団 参加メンバー募集案内

\* 工房のぞみ21、ナターシャさんからのお手紙

\* 特別寄稿第2回 ベラルーシに暮らして

\* 第6回、ベラルーシについて学んでみよう

\* 検診を無事終えた事務局からの財政報告

ベラルーシでの甲状腺ガンの早期発見・治療を目指して

# 第5回ブレスト検診報告

文・絵 寺嶋 悠 (チェルノブイリ支援運動・九州 運営委員)



検診チーム全員集合



ベラルーシ赤十字から感謝状を渡される寺嶋悠さん

チェルノブイリ支援運動・九州は、2005年10月30日から11月11日の2週間、第5回ブレスト移動検診団をベラルーシへ派遣した。派遣メンバーは清水一雄医師(日本医科大学主任教授)、武市宣雄医師(広島甲状腺クリニック院長)、村瀬幸宏臨床検査技師(日本医科大学附属病院)、三木亜希臨床検査技師(広島甲状腺クリニック)、星正治先生(広島大学原爆放射線医科学研究所)、医療通訳で現地コーディネーターの山田英雄さん、現地通訳としてアララさん、支援運動・九州より事務局の三島さんと、運営委員の寺嶋悠。さらに日本医科大学6年生の高橋恵理佳さん、4年生の中村壮香さん、清水医師の息子、清水基さんがそれぞれ社会勉強のためにと自費参加し、検診や取材などさまざまな面で検診団をサポートしてくれた。

## ◆第一線の情報を現場の医師へ 医学シンポジウム開催

11月1日、ミンスクにある医学再教育センターで医学シンポジウムを開催し、全国から甲状腺専門医約80名が集まった。ベラルーシには独特の医師研修制度があり、医師が再び大学へ戻って研修を積み、病院へと戻るという再教育制度が実施されているが、支援運動・九州の検診団来訪に合わせて、毎年医学シンポジウムを開いている。

今回のシンポジウムでは、星先生による放射線量と医療についての研究報告、清水医師による日本での内視鏡を使った傷跡をほとんど残さない甲状腺ガンの手術法紹介、武市医師による甲状腺に関するさまざまな疾病の差異とその診断方法、支援運動スタッフによる活動や現在のプロジェクトの紹介についてプレゼンテーションを行った。

## ◆低濃度汚染地で暮らす人びと ラゴイスク地区中央病院での検診

また今回は、ミンスク郊外のラゴイスク地区中央病院にも立ち寄った。ラゴイスク地区は、地区内にホットスポットと呼ばれる放射線量の比較的高いエリアがあるが、今でも多くの人々が生活している。また、ベラルーシ南部の汚染地からの移住者も多く、甲状腺に関する疾患などが出ているという。

私たちの訪問に合わせて、特に急いで診断を受けたい甲状腺の患者さん15名が病

院内に集まっていたため、急遽簡略ながら甲状腺ガン検診を行った。

## ◆消えることのない患者の不安

ミンスクでのシンポジウムを終えてブレストへ移動し、患者31名に対して甲状腺ガン検診を行った。

これまでも紹介してきたが、ブレスト州などでは国際赤十字による移動検診プロジェクトがこの7年の間実施されており、私たちのプロジェクトに参加しているアルツール医師たちは、この国際赤十字のプロジェクトチームとして、州内で年間1万5000人の患者の甲状腺ガン検診を行っている。

今回検診を受けた患者は、ブレストとミンスクの中間地点にあるピンスクでの



医学シンポジウムで学ぶベラルーシの医師たち

集団検診で異常の見つかった患者だった。中高年の女性が多いが、中には20代の女性、年配の男性患者もいる。検診の合間に患者さんにインタビューをしたところ、以前から甲状腺の異常を指摘されていた患者さんといえば、今開始して異常を指摘された患者さんもいた。すべての患者さんが、チェルノブイリ事故の被曝による自分の健康状態をとて不安に思っていて、口々に「次回はいつ来てくれますか」と尋ねられた。

心苦しい気持ちで、患者さんの数人に、1986年の事故の時どこにいたかを尋ねたところ、「何も知らずに畑仕事をしていた」「メーデーのパレードに子どもを連れて参加していた」という答えが返ってきた。たった一度の事故が多くの人びとの健康被害を生んだことを、改めて目の当たりにして衝撃を受けた。患者のみなさんが、一日も早く健康を取り戻すことを願わずにはいられない。

### ◆帰国前に第一次の診断結果を出す 臨床検査技師の活躍

支援運動・九州では、甲状腺ガン検診の回を重ねるに連れ、できる限り私たちの滞在中に結果を現地へ返すことを一つの目標にしている。患者さんの多くは、当然ながらできるだけ早く検診の結果を知りたいと強く思っており、日本へ帰国してからのやりとりはどうしても翻訳や情報のやりとり

時間がかかってしまう。そのため、検診を終えて現地を出発するまでの間に、吸引穿刺をしたすべての患者さんの細胞を見て、第一次の仮診断を出すように全力を上げている。

今回の検診では、武市医師と三本検査技師が、過去に診断結果を十分に確認できなかった今回の細胞を確認作業に、清水医師と村瀬検査技師が患者の検診と細胞診とを担当していただいた。特に村瀬さんには、日本での通常の仕事の何倍もの仕事を、わずかな時間でこなしていただいたおかげで、すべての患者さんに対して仮診断を出すことができた。心から感謝するともに、今後はこういった過負担を減らせるよう、検診体制を見直すことも一つの課題である。

改めて感じたのは、当然ながら、現地には今も非常に多くの困難を抱えた人びとがいるということである。日本の医師との技術交流・研修によって育った現地医師への信頼は非常に高く、医療支援を今も続けている日本の市民のみなさんへ、言葉にならないほど多くの感謝の気持ちを感じられていると、肌身で感じた。チェルノブイリから19年が過ぎ、まもなく20年を迎えようとしている。みなさんの支援をお預かりする形で、被災した現地の方々へ、今後も確かな医療支援を続けていきたい。

## 今回の検診を支えてくれたスタッフのみなさん

今回の検診は、多くのスタッフの協力のおかげで無事終了することができました。ありがとうございます。

- muluuma** (ミルユマ) - 支援運動九州事務局 三島さん
- HAKAMAYA** (ハカマヤ) - 現地で検診にあたってくださった方
- Dr. プリール先生** (Dr. Priir) - 細胞診とコウモリ
- Dr. ウラジミール先生** (Dr. Vladimir) - 甲冑除毛から検査まで担当した医師です。
- YAMADA** (ヤマダ) - 山田さん
- TAKAYAMA** (タカヤマ) - 日本医科大学4年 高橋さん
- MURASE** (ムラセ) - 臨床検査技師 村瀬さん
- Dr. 三清水先生** (Dr. Misumi) - 検査結果を報告し、検査結果を伝える役割を担いました。
- Dr. 武市先生** (Dr. Taki) - おなじみ、広島甲状腺クリニック院長、無数の情熱に頭が下がります。
- 三本さん** (Mitsuhito) - 臨床検査技師
- TERASHIMA** (テラシマ) - 支援運動九州スタッフ 三島さん



## 8年間の歳月を経て培われた成果

### アルツール医師はトップクラスの医師に成長

# 第5回プレスト検診報告

清水一雄医師が実感した成果と変化



アルツール医師に指導しながら検診を行う清水一雄医師。(日本医科大学主任教授・内分秘外科部長II写真中央) 1999年、2000年、2004年に引き続き、ベラルーシでの検診は今回で4回目の参加となる。現地の医師の技術向上に取り組むとともに、日本国内においても医学生にチエルノブイリの現状を伝え、医学生が検診の現場に参加する機会を作っている。

## 4回目のベラルーシ訪問

2005年のプレスト市における秋の検診に参加させていただいた。私がこの検診に最初に参加したのは1999年6月、ストーリーリンでの検診である。当時片桐先生、武市先生のご努力で検診環境はだいぶ改善されていたとのことであったが、ストーリーリンのホテルではエレベータが壊れたままになっており、検診では、超音波検査、吸引穿刺による細胞診は、殆ど私たちが行い、現地赤十字からの医師(アルツール、ウラジミール)は見学同然であった。また、パニコロウ、ギムザ染色も現地技師に教えながら染色、検鏡するという状況であったのを記憶している。それでも私にとっては、この地での検診を主体とした医療活動は、今までにない経験で、素朴で優しい人々との心のふれあい、現地で手伝ってくれた多くの医師の勤勉さ、純粹さにふれ、美しい自然、景色と相俟ってそれは新鮮なものであった。

## 若い医学生たちが示す

### 検診への高い関心

2000年、ストーリーリンでの秋の検診に参加、そしてプレスト市にお

ける検診へと7年が経過したが、検診の場をプレスト市へ移してから日本医科大学では変化をみせたことがいくつかある。まず2003年から病理技術員として渡會さん、村瀬さんと日本医科大学病理部から参加するようになったことである。普段、私が行っている細胞診を診て頂き一緒に仕事を行っているのでお互い連携がとれて準備段階からやりやすかった。また、特記すべきことは2003年から本学の学生が興味を示し、積極的にこの検診に参加するようになった事も挙げられる。当時第4学年の高橋恵理佳さん、2004年には第4学年次の賀来住男君、そして今回の2005年では第6学年となった高橋恵理佳さんに第4学年の中村壮香さんが加わった。更には私の3男(清水基)も希望して参加させていただいた。

私は常日頃から、学生の講義の際、早くから広く世界に医療の目をむけよと話しており、ベラルーシでの経験を講義の中で伝えていたが、これほどまでに学生が反応を見せるとは思わなかったと同時に嬉しくもあった。

今回の検診前には、中村さん、賀来君を中心に、本学の学校祭でチェ

ルノブイリ原発事故の現況を調査、展示し、募金を集めチエルノブイリ支援運動・九州の事務局に寄付する活動を行った。この寄付の中には、本学の荒木学長、山本学生部長をはじめ他の教員、学生も加わって(もちろん私も)いた。

## 大学を挙げてのサポート

### 日本医科大学の取り組み

このように学生の検診参加は、人数を要するため学期中、試験中であるにもかかわらず、教務課の強力なサポートを始め、関係する各講座の教授による学生に対する試験日の配慮、授業欠席の許可などに至るまで、学生に対する経済的支援も含め学校を挙げての支援となってきたことがあることを強調したい。

更に日本医科大学は、これらの学生の国際貢献、国際医療活動に関する積極性を高く評価し、年間、課外活動で顕著な実績を残した学生に与えられる橘賞を授与している。これまで高橋さん、賀来君が受賞している。検診では、驚くことがいくつかあった。まず受診者に子供が少なくなったことである。1999年、ストーリーリンでの検診では子供が多数いたが今回は殆ど大人であり事故後19



年という年月を肌で感じた。しかし、大人の甲状腺癌が更に増加している事実を鑑み、改めて検診の重要性を感じるとともに、この事故を風化させることなく今後の検診に新たなエネルギーを与えてくれたと感じた。

## アルツール医師の成長 現地で広がっていく 確かな技術

第2は、アルツールのエコーガイド下吸引細胞診技術の顕著な向上と正確さである。最初会った時との技術的な差は目を見張るものがあった。今まで行ってきた穿刺の回数を聞き、恐らくわが国でもトップクラスの技術を有する医師に成長していた。これは、当初から献身的に指導してきた武市先生、片桐先生らの努力の賜物であると思っている。そしてアルツールは自分で取得した技術を今、ベラルーシで少なくとも6人の医師に教育したと話していた。これこそ、我々検診団の求めた成果の一つではないかと思う。現地の人に教育し、現地で日常生活の中で正確な診断が出

来るようになることが重要なことである。今後望むことは、お互いの技術、知識を更に向上させるため支援運動の交流を基盤として、今回のようにシンポジウムを多く行い最新技術の提供、相互の知識の向上、情報交換、さらなる親睦、友好へと発展していければよいと思う。

今回、検診対象は31人で、2人に癌、4人に癌の疑いが持たれた。この結果は村瀬さんの献身的努力により、昨年の渡倉さんと同様、当日染色、検鏡、診断まで行いベラルーシを離れる前に全ての結果を出し、現地に還元してきていることを付け加えたい。

今後も、私たちはこの支援運動には可能な限り参加し、協力したいと考えているし、活動の様々な面での更なる発展を祈念している。

最後に、事務局の寺嶋悠さん、三島さとこさん、コーディネーターで通訳の山田英雄さんには大変お世話になりました。この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

◆◆◆ 今回、清水先生の三男、基君も参加してくれました!! ◆◆◆

## 「自分に何ができるのか？」

ベラルーシに戻ってからもずっとそのことを考えています



清水基さん

数年前、初めて赴いたベラルーシでの検診から帰ってきた父（清水一雄医師）はいつもの顔ではありませんでした。

日本の病院では多分、「何時間も待たされた挙げ句に診察はたったの5分!」

と眉をしかめる人もいるだろうと思います。一方、移動検診先では何人も人が行列を作り、何時間待ってでも検診を受けに来て、心から「ありがとう!」と言ってくれる人ばかりだったと父から聞きました。それと、美しい雄大な自然、今も残る原発事故の爪痕、ベラルーシの歴史。関連書籍を読んだだけでは勝手な想像が広がるばかりでした。

果たして父が見て来たのはどんな世界なのか、どんな人たちがどんな暮らしをしているのか。そう思った僕は今回、ベラルーシを訪れることにしました。

実際に現地についてから出会うのは明るい笑顔や美しい風景ばかりで、想像していた様な悲惨な場面

に出くわす事はありませんでした。反面、目に見えない放射能の影響が今もこの国に様々な形で残っている事を思うと不思議な気持ちでした。（優しい人ばかりに思えたのは、チェルノブイリ支援運動・九州の方々やコーディネーターの山田さんのものすごい行動力や、実際に検診を行っている医師の方々の何年にも及ぶ努力が現地との繋がりを創り、そのおかげで僕のような突然現れた何者か分からない日本人にも笑顔で接してくれたのだと後に気づきました。

中でも、のぞみ21のナターシャさんが僕に民芸品を一つくれた事が一番印象に残っています。「これを持って帰って。そして、日本に帰っても私たちの事を覚えていてね。」そう言って強く僕の手を握りました。もちろん日本に帰って来た今、ベラルーシで出会った人達を忘れてはいません。忘れていないけれども、医者でもなくどこかのNGOに所属してる訳でもない一般人の僕がこの旅を経て、何が出来るか?と、ずっと考えています。答えが出るまで、まだまだ旅は終わりそうにありません。体感したベラルーシの空気と、遠い2つの国の人同士が繋がりを持っているのを目撃できた事。それが、僕にとって何よりの収穫だったのだらうと思います。

# チェルノブイリと日本の若者たち

## わたしたちにできることを探して

「自分に一体、何ができるのか・・・」原発、環境破壊、絶えない戦争と、今の社会はあまりに問題が多すぎて、その問いの答えを見いだすことは、とても大変なことなのかもしれません。しかし、チェルノブイリというひとつの問題の中からも、自分にできることを確かな手応えとともに見つけだしている若い世代の人たちがいます。チェルノブイリ支援運動・九州で取り組み続けている甲状腺ガンの検診活動に参加した医学生の想い、また美容師が取り組んだチェルノブイリ支援イベントの様子をお伝えします。

### —— 第5回ブレスト検診報告

## ベラルーシで得た光

高橋 恵理佳（日本医科大学6年生）



高橋恵理佳さん

### 医師としても一人の人間としても ベラルーシの人々と共に生きていきたい

ミンスクの空港には2年前の記憶と何一つ変わらぬ風景があった。着陸前に飛行機の窓から見えた見渡す限りの森や畑、その所々に青いつぎ当てるように見える湖、真昼だというのに薄暗く寒いがらんだ空の空も、厳しい税関も全て2年前と同じで懐かしい心地良さを覚えた。ここだけめまぐるしい世間の変化を横目に、変わらずにゆったりとした時を過ごしているかのようにあった。しかし街中へ入ると見慣れないビルやマンション、店がいくつも出現していて、当然ながらこの国にも確実に時が流れたことを感じた。

2003年夏以来、2度目の訪問であった。今回卒業試験の最終科目を延期してもらってまで参加したのには理由があった。2年前の感動は、その後の私にとって穏やかな光となっていた。あのとき自分の学んでいることが遠く離れた国の言葉も文化も全く異なる人に必要とされているのを見て涙ぐんでしまった。そして彼らの悲しみや

が目指していることをきちんと果たそうと思った。その思いがこの2年間を生きる間、暗闇に迷い込んでつまずく度に足を照らす光となって何度も何度も私を救ってくれた。この光がなかったら私はここまで歩むことができなかったかもしれない。そして卒業試験や国家試験といった大きな壁に直面している今だからこそ、私は再びベラルーシを訪れ2年前の思いを蘇らせることで、もう一度光をもらいたかった。

2年という時を越えて街には新しい建物が増え医療も確実に進歩していたが、そこで私が出会ったのは前と変わらない笑顔で私達を待っていてくれる人たちの姿だった。それは様々な困難に吞まれて私が見失いかけていた大切なものを思い出させてくれた。どんなに時が経って街の様子が変わろうとも彼らが私達を必要としてくれ、私達が彼らの支えになれることは決して変わらないと信じている。そして2年前に抱いた願いも私の中で変わらずに生き続け、それが私の人生の支えとなることにも変わりはない。それが共に生きていくということではないだろうか。だからこの先どんなことがあっても、この絆があるから必ず医師になってまたここに戻って来ようと思う。そう思える私は再び光をもらったのだろう。

最後に私にこのような大切な場所を与えてくださった清水先生と事務局の方々、支援者の方々に心からの感謝を申し上げて締めくくりたいと思う。本当にありがとうございました。

苦しむ、そこから前に進んでいこうとする勇気を教えてもらったのだから、医師としても一人の人間としても彼らと支え合い共に生きていける人になりたいと願うようになった。そのためにも今自分

# 相手を感じ行動できる協力関係を

中村 壮香 (日本医科大学4年生)



中村 壮香さん

清水教授の講義のなかで、私はチェルノブイリでの支援活動を知り、チェルノブイリ通信を見せて頂いた。そこでは歴史的事実だけでなく、十人十色の人間模様を垣間見ることができた。この印象がとて強く、自分も実際現地に行き、今の状況を肌で感じたいと思うようになった。医療を通じて支援活動とは一体どのようなものか。見て、聞いて、感じてみたいと思った。

最初に訪れたのがミンスク。まず、赤十字を訪問した。こうして現地の方の顔を見、お話を伺うことで、自分がベラルーシでの活動に参加している実感が一気に湧いた。その後は医学シンポジウムに出席。会場では、過半数を超える女性医師の姿に圧倒された。男性医師は生計を立てるため国外で働くことが多いという。プレストでは、検診活動に参加した。到着するとすでに多くの患者さんが廊下で列を成して待っていた。彼らには、この東洋人はどのように映ったのだろう。穿刺が終わると、幾人かの患者さんは涙を流されていた。少しでも彼らに近づければと思った。そして励ましの一言も表現できない言葉の壁をマイナスに感じた。しかし一方で、言葉にめげない場面もあった。標本作りの補助をしたのだが、現地の先生にご指導いただいたときは、ジェスチャーと英単語の助けを借りて、何とか意思の疎通に成功したのだ。このふたつの出来事をこうして眺めてみると、言葉や異文化の壁は元から存在するのではなく、自分の勢いの弱い部分が形成しているように思えてくる。感じた壁は気持ちで越えていけると感じた。様々な立場の人と交流し、人の心に触れ、日常を忘れるほど旅に集中できた。一方的に何か出来ることがないか探っていたこれまでの私の考えは、相手を感じ行動する、「協力」という文字に変わった。互いへの興味と思いやりから協力関係が生まれる。このような人とかかわり方を実感できたことを、これからの活動の源としていきたいと思う。

日常を忘れるほど旅に集中できた  
感じた壁は気持ちで超えていける…

## —— チャリティーカット報告 美容師にできること

井上 充昭 (Hair Nu-DA)



チャリティーカットの様子

美容師として何か出来ることがあるのではないかと考えた。お金を送ることは簡単なこと。でもそれは何か違う気がした。そこで考えたのがチャリティーカットだった。自分たちでカットしてその売上金を寄付する。これはイケると思った。そこでNGO関係に詳しい私の弟に相談をしたところ、チェルノブイリ支援運動・九州を紹介してくれて、この企画が始まった。友人の美容師さんたちにも声をかけ、色々な準備をして、チャリティーカットにこぎつけた。当日もたくさんのお客様に来て頂き、メンバーも超感動だった。その中でこんなエピソードも。眼鏡をされているお客様は、眼鏡をお預かりし、カット後に眼鏡をかけてもらい髪型を確認して頂く。が、そのお客様は最後にその眼鏡をお返しした際、なんと、その眼鏡はとんなりの人の眼鏡だった！大失敗！。そういえばこのお客様、来られた時は眼鏡かけてなかった。でもなんで目も悪くないのに眼鏡かけて鏡みたんだらう？ そんなこんなで色々ありましたが、無事1日が終わり、チャリティーヘアークットも大成功。たくさんの方々の御協力を頂きありがとうございました。また来年もできたらいいな！

美容師とチェルノブイリ  
何か自分にできることは？

2年位前のことです。女優の藤原紀香さんがアメリカの空爆を受けたアフガニスタンを取材する番組があった。その中で手足がなくなったり、家がなくなったり子たちを見て彼女が「私に出来ることって何だろう」と考え、その子どもたちの写真を撮って、写真展を開くと言っていた。その時に、ふと自分は美容師として何か出来ることがあるのではないかと考えた。お金を送ることは簡単なこと。でもそれは何か違う気がした。そこで考えたのがチャリティーカットだった。自分たちでカットしてその売上金を寄付する。これはイケると思った。そこでNGO関係に詳しい私の弟に相談をしたところ、チェルノブイリ支援運動・九州を紹介してくれて、この企画が始まった。友人の美容師さんたちにも声をかけ、色々な準備をして、チャリティーカットにこぎつけた。当日もたくさんのお客様に来て頂き、メンバーも超感動だった。その中でこんなエピソードも。眼鏡をされているお客様は、眼鏡をお預かりし、カット後に眼鏡をかけてもらい髪型を確認して頂く。が、そのお客様は最後にその眼鏡はとんなりの人の眼鏡だった！大失敗！。そういえばこのお客様、来られた時は眼鏡かけてなかった。でもなんで目も悪くないのに眼鏡かけて鏡みたんだらう？ そんなこんなで色々ありましたが、無事1日が終わり、チャリティーヘアークットも大成功。たくさんの方々の御協力を頂きありがとうございました。また来年もできたらいいな！



# 現場で感じた強い期待

臨床検査技師／村瀬 幸宏さんからの報告

ベラルーシでの甲状腺ガン検診において、その検診結果を迅速に伝えてほしいというのは現地の患者さんたちの切実な要望だ。日本に持ち帰って検診結果を出しているのは時間がかかるため、チェルノブイリ支援運動・九州では、検診したその日のうちに結果を出すことを目指している。その使命を果たす際、一番多忙な任務を担うのが臨床検査技師の方々。今回、慣れない異国の地での検診に初めて参加し、無事その役目を果たした臨床検査技師の村瀬さんからのレポート。



検鏡する村瀬臨床検査技師

私たちは2005年11月にベラルーシ共和国ブレスト市において甲状腺ガン検診を行いました。以前、私は上司の渡會さん(2003、2004年検診参加)に参加するよう勧められましたが、最初は断りました。二十年近く細胞診に従事していますが、外国で、それも細胞診のなかでも甲状腺という判定の難しい臓器を一人で診て、なおかつその日に診断を下すという責任重大な仕事をする自信が私にはなかったからです。(断る理由の一つに飛行機が苦手ということもありましたが)しかし、渡會さんが参加した時の検診場面の写真を見たり話を聞いているうち自分も微力ながら力になろうと思いい、目的を果たすため自分なりに準備をはじめ万全の体制で検診に臨む事にしま

現地で診断し、その場で結果を伝える  
検診チームに課せられた使命

した。

しかし、決意したものの初めていく国で一日で30名近くの診断を下す、これは、通常の日本での業務に比べても過密で過酷なスケジュールであり無事終了できるか心配でした。

期待と不安で、ミンスク空港に着きましたが、空港内は暗く、人も少なく、税関で支援助物のトラブルもあり不安が増してしまいました。

不安を抱えたままミンスクからブレストに移動し、いよいよ検診の始まりです。

事前に現地のアルツール医師らによりガンの疑いのある31名を選んで受診していただきました。事前に人数は聞いていたもので学生さんたちには穿刺の補助、私は染色、鏡検という役割分担を自分なりに考え検診に臨みましたが、予想以上に染色に時間がかかり1日目はほとんど鏡検することができませんでした。2日目からは学生さんたちにも染色を手伝ってもらい無事に診断を下すことができました。検診結果は、31名中2名にガンが見つかり、4名にガンの疑いがありました。そして驚いたことに検体不適標本が1件だけということです。このこと

は、アルツール医師の穿刺技術が高度である証であり、そのため細胞診断が容易で無事終了できた要因の一つでした。検診も無事終了しブレストからミンスクへ帰る途中、空一面星が輝きまるで星図盤のようで、私は初めて天の川を見ました。検診も無事終了したという安心感もあってとても感動しました。

帰国後、清水先生を中心に反省会を行い、今回の参加者の他に前回参加された江本先生や渡會さん、賀来さんそして検診に興味をもった学生さんも参加されました。これらは日々変化するベラルーシの情勢や要望などの情報交換の場として今後も実りのある検診を続けていくうえで大変重要と考えました。

私は、初めて検診に参加し、その日に診断を下して欲しいという現地の期待が高いことを感じました。私も日本でよりいっそう診断技術を向上させ、今後も良い検診ができるようにお手伝いさせていただきます。

今回の検診がスムーズに進むよう協力していただいた通訳兼コーディネーターの山田英雄さん、通訳のアラさん、そして事務局の寺嶋悠さん、三島さとこさんには心より感謝いたします。

## 8年間の継続、そこで得た成果の報告として

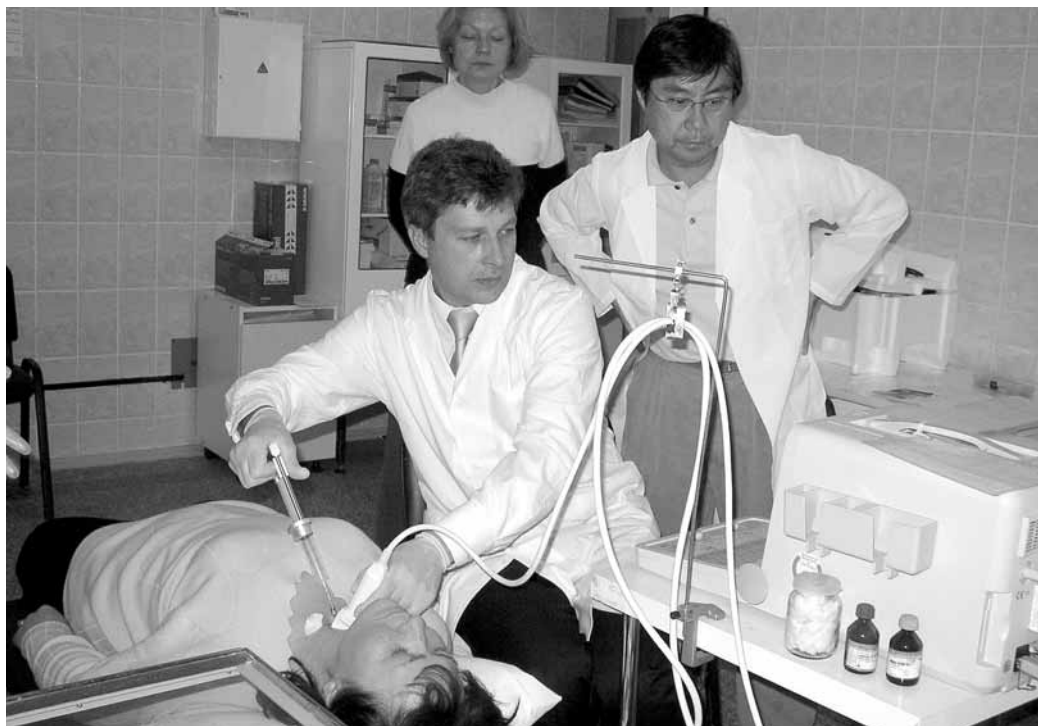
ブレスト市での移動検診は今回で5回目。ストーリーン地区での検診をこれに合わせると、これまでベラルーシで14回甲状腺ガン検診を行ってきたことになる。この間、ベラルーシと日本の専門家が合同で行ってきた検診を受ける患者は、ブレスト州立内分泌診療所のアルツール医師らによる国際赤十字の移動検診で異常が見つかった人々だ。

年間1万5000人を診るといふ、国際赤十字移動検診チームとの協働により、チェルノブイリ支援運動・九州の移動検診は飛躍的に高い効果を上げ、さらに日本からの確かな医療技術を現地に広めることにも役立っている。

アルツール医師に、国際赤十字移動検診チームの取り組みや現在の思いを聞いた。

インタビュー：寺嶋 悠（チェルノブイリ支援運動・九州）

ブレスト州立内分泌診療所所長、国際赤十字移動検診チーム  
アルツール・スタニスラフ・グリゴロビッチ医師



◆国際赤十字の移動検診チームとして、  
普段はどのような活動をされているの  
ですか？

国際赤十字の移動検診チームとして、7年間活動しています。この7年の間に、僻地に住む村人を中心に、のべ12万人以上の患者を検診しました。都市部から遠く離れた村に住む人びとは、自分たちのお金や車を使って州の都市や地区の町の病院まで行って検診を受けることができません。また、村の人びとは1年中農作業で忙しく生活しているという理由もあります。7年間で検診した患者の中から、300人の甲状腺ガンが見つかりました。非常に高い技術を身につけた医師たちが都市から遠く離れた僻地に検診に行くことは、もともとも良い検診のやり方だと思えます。移動検診プロジェクトによって、甲状腺ガンを一番初期の段階で見つけることができるようになりました。もちろん地方に住む人びとの検診は無料です。そのためみんな私たちの訪問を大変歓迎します。

◆国際赤十字の移動検診プロジェクトは、  
現在どこで行われているのですか？

私たちのチームは、主にブレスト州で検診を行っています。ゴメリ州、モギリョフ州でも同じような移動検診を行っています。ウクライナで2つ、ロシアで1つの移動検診チームが検診を行っています。検診を行っている地域はすべて、チェルノブイリの周辺地域にあたります。なぜブレスト州においてもっとも多くの甲状腺ガンが見つかったのか。これは日本の医師たちと協力して検診を行っているためです。私たちは日本の医師から大変多くのことを学んできました。

## ◆他の移動検診チームとの医学的な交流はありますか？

ときどき、自分たちのチームの経過報告をしています。しかし、ガンの疑いのある細胞を取り出しそれを診断するという「吸引穿刺」を行っているのは私たちがチームだけでした。私は日本の医師から教わった吸引穿刺の技術と経験を、ウクライナとゴメリで活動している2つのチームに教えました。

ブレスト州の3つの地区では、この病院で勉強した医師たちが検診を行っています。彼らは、ここで学んだ日本の医療技術のおかげで、自分たちで吸引穿刺を行っています。国際赤十字の移動検診チームが来なくても、自分たちの力で吸引穿刺することができます。



甲状腺の細胞を保管するプレパラート

その細胞をガラスのプレパラートに固定し、この病院でその細胞を診断するのです。

アリーナ医師（アルツール医師のパートナー）は日本でその細胞の診断技術を勉強しました。日本のいろいろな技術がよく分かり、自分で日本の専門家と同じように、甲状腺ガンなどさまざまな病気を診断することができます。日本での研修を受けてから、アリーナ医師の技術はミンスクでも高く評価されています。

## ◆国際赤十字のプロジェクトは今後も続くのですか？

国際赤十字からは、あと1年間はこの事業を続ける予算があります。けれども、国際赤十字社の事業予算がストップしてしまっても、私たちはベラルーシ政府の保健省や他の予算から補助を得て、ぜひこのプロジェクトを続けていきたいと思っています。

## ◆アルツールさんの名の医師を育てたと聞きましたか？

ブレスト州のピンスク地区1名、バラノビッチ市1名、ルニエツ地区1名、ブレスト市の医師がこの病院で研修しました。それにゴメリ州、ウクライナのジトミール市の医師の合計6名が、ここで甲状腺ガンの診断技術全般を学びました。

私たちは、甲状腺ガンの最初の段階を見つけるために、このような吸引穿刺の技術は欠かせないと考えています。そういった技術を持つ医師が多ければ多いほど、甲状腺ガンの発見がもっと早くなり、多くの患者の健康を守るにつながると思います。

## ◆1997年にストーリーリン地区でスタートした検診は、今回で14回目になります。終わってみてどのような感想を持っていますか？

検診のそれぞれの回は、それぞれに特徴があります。今回の検診は、短期間でしたが非常に充実した内容となり、大変印象深いものでした。2日以内にすべての患者の検診を終え、検診と同時並行ですべての診断結果を出し、日本人医師が病院を発する前にすべての検診結果を聞くことができました。こういった日本人医師の仕事の速度を見ると、自分たちもまた、もっと早く患者の住む地域の医者に結果を送るために努力をしなければならぬと思います。検診、診断、結果を伝えるという過程を、今よりずっと短くさせることに全力を尽くしたいと思っています。

今回ピンスクから来ていた患者は、検診の結果についてとても心配しています。来週までにすべての結果を患者へと戻したいと思っています。

## ◆もうすぐエルノブイリ20年を迎えます。どのように感じられますか？

私は専門家ですので専門的な考えを申し上げます。今の子どもたちは、幸いにして甲状腺ガンがほとんどありません。しかし残念ながら、チェルノブイリ原発事故当時に子どもだった今の大人の世代では、よく甲状腺ガンが見つかっています。大人は新しい仕事をもらって遠く離れたところへ引っ越すことなども多く、移動してしまっています。そのため、事故当時に子どもだった世代を1ヶ所に集め、検診を行うことは





プレストでの検診の様子

大変難しくなっています。しかし、私たちの課題は一人も漏れることなくみんなを検診するため、努力を尽くすことだと思っています。

もちろん、私の願いはただ一つ。将来、チェルノブイリのような悲劇が二度と繰り返されないこと。その一つだけです。

私の計算では、チェルノブイリ原発による甲状腺ガンやそれに関連する病気は、あと100年以上続くと思います。おそらく2106年まで続きます。将来的になくなるだろうと期待していますが、これから先の100年というのは恐ろしい100年です。

◆ベラルーシで活躍する、アルツールさんたちのような志と熱意のある医師たちに出会えたおかげで、この移動検診を始めた当初に私たちが目指した目標より、ずっと高いところに来ていると思います。この活動を日本で支えている、たくさんの方のみなさんに一言メッセージを。

チェルノブイリの悲劇の犠牲になったベラルーシの人びとのために支援を寄せて下さる日本の皆さんへ、私からだけでなく、ここで検診を受ける患者すべてに代わり、心からお礼の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございます。皆さんからの人道的な支援がなかったなら、私たちの力だけではこの検診活動を行うことはできません。日本から届けて下さる医療機器や試薬などは、ここでは手に入れることができないものもあります。

みなさんからの支援によって、ここで検診を行うことができ、多くの大人や子どもの命を救うことができます。もう一度、心からの感謝を申し上げます。

## チェルノブイリ支援運動・九州第25次調査団 参加メンバー募集!! ～事故から“20年”を迎える被災地の今にふれる～

まもなく「チェルノブイリ原発事故」から“20年”。

最も被害を受けたベラルーシ共和国は、現在どうなっているのでしょうか。そこに暮らし続ける人々は、この20年間どんな生活を営み、どのように事故と向き合ってきたのでしょうか。

事故から20年目を迎える「チェルノブイリ」の“今”を一緒に体験し、調査するメンバーを募集しています。

チェルノブイリ支援運動・九州が行なっている被災者への支援活動に立ち合い、皆さまの募金が実際にどのように役に立っているのかも見る事ができます。また、首都ミンスクにてベラルーシ政府とUNDP（国連開発計画）によって開かれる「チェルノブイリ20周年国際会議」への参加・発表も予定しています。

- 期 間：2006年4月12日～24日前後
- 訪問地：ベラルーシ共和国【首都ミンスク、プレスト州プレスト市、ゴメリ州ゴメリ市、(グルシコピッチ村)】
- 参加費：約30万円  
【渡航費（福岡または成田発着）、ピザ手配にかかる費用、海外旅行保険代、滞在費（宿泊費・食費）等】
- ※現地での移動費は、チェルノブイリ支援運動・九州が負担します。
- ※その他、日本国内での移動・宿泊費、個人の買い物、飲食、臨時出費などは参加者の自己負担となります。
- 内 容
- ※現地医療機関（ベラルーシ赤十字、ミンスクやプレストの病院）訪問、支援物資の贈呈。
- ※事故被災者の家庭訪問、本人やその家族へのインタビュー。
- ※「チェルノブイリ20周年国際会議」に参加。4/19～4/21。
- ※福祉工房「のぞみ21」（事故被災者や障がいを持つ若者たちが働く）訪問。
- ※被災した子どもや母親を支援するNGO「コンフィデンス」の事務所訪問。
- ※その他（森でのハイキング、プレスト要塞見学、市場での

- 買い物など
- 参加申込について
- \* 参加ご希望の方は、詳しい資料と申込書をお送りしますので、事務局まで電話またはFAX、E-mailでお問い合わせ下さい。
- \* 募集のめ切は、2月15日までです。合わせてパスポートもご用意下さい。
- \* 参加者には原則として事前の学習会（3回程度）に参加していただきます。（遠隔地の場合は応相談。）
- \* 帰国後、簡単な報告書の提出と、報告会への参加をお願いします。
- \* 知識、経験、年齢、国籍、性別等は問いません。
- \* 申し込み多数の場合は、参加者の選考をさせていただきます。予めご了承ください。

お問い合わせはこちらまでお気軽にどうぞ  
チェルノブイリ支援運動・九州 事務局  
〒807-0052 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16  
ウィンドファーム内  
TEL/FAX：093-203-5282 e-mail：jimu@cher9.to  
website：http://www.cher9.to/

# 工房のぞみ21 ナターシャさんからのお手紙が届きました

## 親愛なる皆様！

来たる新年の挨拶を心から申し上げます。私とステパン、そして作業所の皆で皆様のご多幸と健康と愛を願っております。そして支援に感謝します。

これで春までの部屋代を支払うことが出来ます。これで私達は2ヶ月後に仕事を続ける希望が持てました。勿論、1月と2月の休みは長いですが倉庫には木工品と麻製品が一杯保管されています。子供の服も一杯できました。これを売るには時間がいきますし、製品を作るための布も必要です。創庫作業には税金と倉庫料がかかります。

今、こちらの人々は正月とクリスマスの為のご馳走と贈り物を買集めています。1月は殆ど売り出しがありません。私は布の買い付けを、私達の製品を買ってもらい始めてからします。これは2月の予定です。

私達が場所を借りているセンター指導部は、私達に2006年6月に大きい部屋を空け渡して欲しいと行ってきました。この為に計画見直しと部屋の修理が必要となります。私達は安い賃借料を払ってきたため、修理代にはなりません。支払い額を上げる事は彼等はできませんので、私達の2部屋を返せとの事です。私達は全てを自分達では出来ません。電気工、配管工、レンガ職人の仕事を理解し、自分達で壁紙も張りなおさなくてはなりません。作業は夏一杯はかかるでしょう。

そして、確かに少なからず物入りです。自分達ですべて計画をたてていかななくてはなりません。借り賃も相当あがります。私達の誰一人例外がありません。

一難さってまた一難。私達は難題なしで生きてはいけません。こうやって自分達の一人一人の問題をなんとか解決するしかないでしょう。希望だけが残っております。神は私達のカと可能性をお試しに試練を送り続けているのでしょう。

もう一度、本当に皆様のお力添えに感謝します。皆様を抱きしめます。  
心からの願いを込めて。

2005年12月21日

ナターシャ ステパン そしてのぞみ21の子どもたちより



工房のぞみ21の作品のお問い合わせは・・・



チエルノブイリ支援運動・九州 事務局

〒807-0052 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16 ウインドファーム内

TEL/FAX : 093-203-5282 e-mail : jim@cher9.to

website : <http://www.cher9.to/>

# 特別寄稿 ベラルーシに暮らして ..... 第2回

在ベラルーシ日本大使館 大使 森野 善郎

(注記) 本文寄稿に際しお断りをします。本寄稿文は、私の個人的な立場から寄稿した文章ですので、本寄稿文の内容を私の外交活動と直接結びつけてお考えにならないようお願い申し上げます。

## ベラルーシ・ミンスク 四季折々の豊かな表情

私の住居は、なかなか良いところにあります。私の事務所から歩いて12分程度のところで、丁度大きな自然公園を横切る形となっています。夏は、地元の人が公園の中に色々な形をした花壇を造り、散策を楽しむ市民の目を楽しませます。冬は冬で真っ白な雪景色で、空を見上げれば、真っ青な冬空が広がっています。初夏から秋口にかけては、この公園には詩人として有名なプーシキンの銅像がありますので、週末には大勢の結婚カップルが集まってきました。

その様子を私のアパートの10階から眺めていると時間の経つのも忘れるぐらいです。夜景も私のアパートからは絶景です。更に初秋の夕方、西空にゆらゆらと落ち行く真っ赤な大きな太陽と、寝倉に帰る数知れない鳥の姿を眺めるのもそれはロマンチックです。事務所に歩いて通う回数が圧倒的に多いのですが、冬の楽しみは、公園にある多くのリンゴの木の枝にたわわになっている青リンゴです。このリンゴは誰が取ってもよく、袋を用意した老人の姿もみられ、息子らしい人が木の枝を揺すってリンゴを落とす親子の姿も見られます。

## 市場での楽しみ

私は毎週土曜日にはミンスク市の中心にある大きな国营市場に一週間分の食料品の買い出しにいきます。屋内には、鶏肉、豚肉、牛肉等売っている大きな売り場があります。しかし、この国では鶏の心臓などは食する習慣がないのか、なかなか手に入れることができません。先般、ウォッカに良く合うと言う豚肉の薫製を早朝買いに行きました。売り場のおばさんが「何処の国から来たか？」と訪ねるので、「日本から」と答えた途端に態度がガラリと変わり、とても友好的になって、次から次へと肉を目の前に出して来ては、これが美味いからとやたらに勧められ、断るのに困りました。男の買い手がその日の最初の買い手になって、金を払ってくれるのは大変縁起の良いことだとそのおばさんは大変喜んでくれ、自分の名刺までくれました。

魚売り場でも必ず顔を出すところがあります。売り場に近づくと向こうから手を振って私にそこに着くのを待ちかねたようにして魚（塩の効いていない生の冷凍鮭）を小気味よくさばいて、売って



ミンスクの市場にて

れます。また、同じ売り場に並んで椎茸やイカの佃煮の売り場がありますが、この女性は朝鮮人の顔をしていて、いつも私の顔をしばしばと眺めます。次に行くところは、野菜売り場ですがこのおばさんも私の顔馴染みで、必ず値引きをしてくれます。私はロシア語が達者ではありませんのでポーランド語を使いますが、お年寄りの女性の多くはポーランド語の判る人が多いので大変親しみを覚えます。買い出しの最後に顔を出すところは、正真正銘のおばちゃんが売っている





沈みゆく夕日

の学生さんを自宅に呼んで、簡単な食事会と飲み会をやることありますが、これも私にとっては結構楽しい一時です。また、こういった日本語学科に学ぶ学生さんに生の日本語と実際の日本の社会の姿を知ってもらうために出張講座を大学でやらしていただけでも大変有意義と思っています。

## 原発事故からの20年 チエルノブイリ国際 会議のご案内

「酔キヤベツと塩漬けキュウリ」を買うことです。その他季節に併せて出てくる果物や野菜を買って帰るのも楽しみの一つであり、最近では、中央アジア地域から来るスイカや桃が美味しいです。

それ以上に楽しいことは一人でも売り場の人と知り合いになれることです。たまに市場の中にも美人コンテストに出たら結構いいところにいけそうな美女がいるのにも驚かされます。そういったハプニングに出会うことに期待するのもスリルがあって楽しいものです。週末には、単身赴任でひとりぼっちですので、時々ミンスク国立大と言語大学の日本語学科

す。

この会議には、現在のところ主に欧米諸国からの参加が予想されますが、わが国の多くの非政府組織によるチエルノブイリ被災者支援の歴史は長く、また、実績もかなりある上、実際我が国の支援団体が行ってきた支援によって裨益を受けたり、受けている医療機関や被災者・家族からこれらの支援に対し心からの高い評価を受けています。反面この国の政府関係者がどれだけ我が国の支援団体が実施している実績と被災者の評価を認知しているか不透明なところがありますので、日本の支援団体がこの会議を利用して、地元政府及び広く世界の関係者に日本の支援団体の活動実績を広く知って頂くようにするのは皆様の努力に報いるためにも良いのではないかと考えています。私も僥越ですが当初から準備委員会のメンバーに入れて頂いております。

今後は、日本からのこういった支援団体の参加が可能になるように出来る限り努力していきたいと思っています。こういった多くの国や国際機関が参加する国際会議では、普段から声を大きくし、顔を売っておきませんかと言うのがなかなか掛けてもらえないと言うのが国際社会での実情です。皆様の支援実績を地元政府や国際機関関係者に認知しても

らうことは、皆様の支援団体に対する寄付を行っている方々の浄財に報いる一つ的手段ではないかと愚考する次第です。

また、皆様の支援団体が実際にこの会議に参加されて、直接被災者・その家族の真の姿を訴えかけることは、この国際会議を単なるプロパガンダの会議に終わらせない為にも是非こういった民間支援団体の参加が必要となると私は考えています。私自身も、九州支援事務局から頂戴したこの支援団体がこれまでに行われた支援実績を当方でロシア語に翻訳し、ベラルーシ国家チエルノブイリ委員会と国連開発計画(UNDP)にこれを配布させて頂きました。まだこの国の多くの被災者・家族が病魔にさいなまれ、生活苦にあえいでいる現状を見過ごすことはできません。実態がなかなか百パーセント表に出て来ない状況の中で私たちは、可能な限りこれらの虐げられた人々の側に立って少しでも彼等の救いになるよう努力したいと思っています。必ず我々の心は、国境を越えて、何時の日か感謝される日がやってくるものと確信しています。

# 第6回 ベラルーシについて学んでみよう

チエルノブイリ支援運動・九州 運営委員・ロシア語通訳

山口 英文

前号ではロマノフ王朝(最後のロシア皇帝ニコライ二世の直系の祖)の成立までを記しました。これによりロシアは中世の影を背負いながら独特な帝政国家としての歴史を1917年のロシア革命まで歩みます。それは安定した幕府が君臨するような日本の歴史と違って、内外の動乱の中を様々な要素を持ちながら歩みます。西欧諸国との違いは、フランスやイギリスの様な市民思想だけでなく、またドイツ、イタリア、オース

トリアのような連邦国家でもない、そして中世からの農奴制のような近代性を抱合して西欧から見れば東方の巨人として時には恐ろしく、時にはエキゾチックにそして豊かな大地の大国として、我々アジアから見ると南下を必死に図るけど、強いけど言葉は悪いですがちょっと間抜けな熊のイメージが定着してくると言えないでしょうか。さて、この中で有名な農奴制が中世の自由な交易と開拓をしていた農民に定着します。農奴制の出現ははっきりとした法令等で発生したものではありません。これはイワン雷帝時代に農民の自由な移動を制限し始めたあたりからと

## 1917年、ロシア革命まで

も言われています。これは農民の身分を農奴(小作人)出身をどこまでも農奴と定めた法令や、地主に借りた開墾費用等が返せないまま土地に括り付けられた経済的制約等の複合的な要素ですが1650年前後に確定したようです。これに対して農奴を嫌って逃亡した人々がコサツクや商人等になってロシアの民衆のエネルギを歴史のなかで爆発させていきます。

ポーランド王国と対立したウクライナ出身のコサツク(前回で説明しました)であるボグダン・フメリニツキーというコサツク指導者がカトリック教会の布教に反対して正教の信仰を振り所にモスクワ王国(ロマノフ朝)、クリミア・タタール(ジンギスカンの末裔です。)と連携してウクライナの独立を図りポーランド王国軍を破り、最終的にはウクライナを主とする人民投票でウクライナとベラルーシがモスクワ王国との帰属を決定しました。当時、イギリスでカトリック教会と対立していた名誉革命の代表的な指導者クロムウェルはヨーロッパにも名をとどろかせたフメリニツキーを英雄として讃えています。フメリニツキー自身は子供時代にカトリック教会の神学校で教育を受けていた事は歴史の皮肉とも言える

でしょうか。

さらにロシア民謡の歌にも有名なコサツクのステンカ・ラージンの大内乱がロシア・ウクライナ・ベラルーシを揺るがします。彼は最初、ロシア帝国の尖兵であるコサツク隊長としてクリミア・タタール国とトルコに對してボルガ川、カスピ海、そして今のイラン付近までを荒らしまわり勇名を馳せます。その後、ロシア国内の土地貴族達の横暴を見て農奴解放を決心し官吏、貴族を襲いボルガ川流域を制圧し、モスクワへ向け進軍を開始していきまがシンピリスクという街の付近で政府軍と決戦をして破れ、南方に逃げドン川流域のコサツク達をまとめて再起を図りますが、結局裏切られてモスクワの赤の広場で処刑されます。今もモスクワの広場にはラージン最後の場所が記念されています。

聖書・典礼等が見直され総主教ニコン(ロシア正教の教皇にあたります。)の下、宗教改革が進みますが、これは西欧の宗教改革と違い国家と総主教の権威が強められる結果となりました。これに対して従来の宗教慣習・教義を主張する人々は分離派教徒と呼ばれ迫害を受け2万以上の人々が犠牲となります。しかしこれはモスクワ総主教の管轄で起きた事であつてベラルーシ主教・ウクライナ主教の管轄ではこの騒動は起きておりません。正教会はこのように政府との密接な関係を持ちながら現在のロシア・ベラルーシ・ウクライナに脈々と生き続け、その独特の荘重な雰囲気は今にも伝え、政教分離の進んだ西欧・日本等の宗教のあり方とは随分と違っておりま。次回はよいよロシアを東の大国として歴史に登場させたピョートル大帝やエカテリーナ女帝のロシア・ベラルーシへと進みます。

このステンカ・ラージンの反乱には当然ベラルーシの人々も多く関わりラージンと共に転戦しています。そしてこの反乱は歴史上で常に抑圧される農民労働者の解放のシンボルとして何度も回想されつつロシア革命まで解放の記憶としてシンボルになり、ロシア人の勇気ある民族的英雄として彼らの記憶に残っています。日本で言えば庶民に人気のある源義経のようなイメージかも知れません。

これらの反乱の英雄も悪役貴族達もそして庶民も当時からロシア正教会の信者達です。1589年にモスクワに総主教座がギリシャ正教会によって認められロシア正教会が名実共出発します。ギリシャ語中心の



# 1000人の女性をまえに緊張！！ 福岡女子高校での講演会

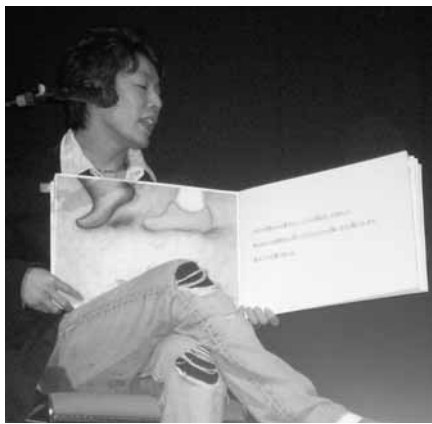
報告／小野 正法（チェルノブイリ支援運動・九州運営委員）

11月4日福岡女子高校で山口英文さんと講演をやってきました。その報告をします。と言っても僕自身緊張のど真ん中にいたのであまり

はつきりと覚えていないのでうまく報告できるかわかりませんが、約1000人という前での講演が始まる前から僕に緊張をあたえてました。（他にはそうは見えなかったらしいですが）実際に1000人を前に立ってみると圧倒されましたし、それがすべて女性というのも何も言えない雰囲気でもありました（笑）。

山口さんの落ち着いた雰囲気にとれだけ助けられたことか。僕の担当は絵本の読み聞かせで「チェルノブイリのたんぽぽ」を読みました。今回、この講演の為に文章を全年齢対象に作り直してみました。と言っても物語自体に変わりはなく表現を変えただけなんですけど。

講演は結果として大成功だったと思います。前半の山口さんの講演は僕も自分の出番前だったので緊張であまり聞けてませんでしたが後半は出番も終わり落ち着いて聞けました。そのときの山口さんの講演で何より心に残ったのが「いつも戦争をやるのは男だから戦争をやらせない為には女性がみんな反対すればいい、そうすれば過半数はとれます」という言葉でした。とても印象的で戦争がない世界「平和」が身近に感じました。僕自身こんなに大勢の前での講演は初めてでしたし高校生に絵本の読み聞かせをするのも初めてだったのでやはり少々不安はありましたが生徒さん達も静かに聞いてくれたと思います。（涙を流してくれる生徒さんまでいました）今回は本当に学ぶことだらけの講演会でした。山口さん、吉本さん良い経験をありがとうございました。



## 事故からもうすぐ20年 忘れちゃならないチェルノブイリ基礎知識

### 【事故の原因 原子力発電のしくみについて】

チェルノブイリ原発事故はなぜ起こったのか。ソ連政府が提出した報告書（1986）では、事故は運転員の規則違反のためとされていた。しかし、その後の調査によって、事故の主な原因は原子炉の構造的な欠陥によるものということが明らかにされたという。

ではそもそも原子力発電のしくみはどういったものか。簡単にいうと核爆弾と同じで、どちらもウラン235という原子核の分裂によって生じる熱エネルギーを利用している。私たちの身のまわりの物質はすべて原子と呼ばれる単位で成り立っている。そして原子は原子核と、その周囲をめぐる電子から成り立つ。原子核はさらに、プラスの電気をおびた陽子と電氣的に中性な中性子とから成り立つ。ウラン235に中性子がぶつかると、原子核分裂が起こる。このとき、2～3個の中性子も一緒に飛び出す。そして同時に大量の熱エネルギーが放出される。核爆弾ではこの核分裂の連鎖反応を利用しているが、原子力発電では連鎖反応が起きないように、飛び出した余分な中性子を取り除くことによって、ゆっくりとした核分裂から安定したエネルギーを取り出すしくみになっている。そのため、原子炉にはウラン燃料のほかに、中性子を減速させる制御棒と、放出された熱エネルギーによって加熱された燃料を冷やすための冷却材が備えられている。事故を起こしたチェルノブイリの原子炉は、全体で1600本あるチャンネル（冷却水が通る筒）が、一本一本独立した冷却水の循環炉となっており、一本のチャンネルに不備が生じても、他の箇所に影響をあたえない構造になっている。しかし冷却水がなくても連鎖反応はつづくため、温度があがるとますます反応がすすむ可能性があることが以前から指摘されていたという。つまり、安全な運転のためには中性子を減速させる制御棒の操作に命運がたくされているので、チェルノブイリ型原発原子炉の暴走には弱いという欠点があった。そしてチェルノブイリでは実際に核の暴走が起こり、原子炉が爆発してしまった。



# 裏方の視点から見たベラルーシでの検診活動

三島 さとこ (チェルノブイリ支援運動・九州 事務局)



三島さとこ (チェルノブイリ支援運動・九州事務局スタッフ)

私は今回の検診で、はじめてベラルーシ共和国を訪れました。支援運動・九州の活動にかかわる以前は、ベラルーシという国は私にとってとても

この裏方の視点から、今回の検診での事務的な手続きを通して感じたこと、気づいたことなどを話したいと思います。

検診の日程を調整したり、予算を出したり、資金調達のために助成金を申請したり、支援物資の手配をしたり、渡航までの手続きをしたりと、出発までにはしなければならぬことは数え切れないほどあり、検診の準備に時間を費やす日々が続きました。特に出発前の1ヶ月間は日本国内でのイベントと時期が重なっていたため、精神的にも体力的にもしんどいもので、残業をしながら「早く家に帰りたいなあ」と毎日思っていました。本当に大変な日々でしたが、その中でたくさんの人との出会いもありました。現地の人々とのやりとりだけでなく、国内でも多くの人とのかわりが存在していることを実感しました。活動を支えて下さる会員のみなさん、支援物資や渡航の手配に協力していただいている業者の方々など、この医療支援活動は多くの人々の協力があって成り立っているのだと、出発前の事務作業をしながら改めて気づかされました。

ベラルーシに着いてからの私の主な仕事の一つが会計係でした。そのため常に大金とともに行動しなければならず、街中を歩いているときやエレベーターの中などで、「今、強盗に遭ったらどうしよう」とびくびくすることもありました。ベラルーシのシールブルという馴染みのない単位のお金も曲者で、換金やホテル代や飲食代を支払うたびにあたふたし、1日の終わりには、電卓を片手にレシートと残金を照らし合わせ、ちゃんと合っているか確認するという日々が続

きました。幸いなことに時差があるおかげで、夜中なのに眠気で頭がボーっとすることなくお金の計算ができました。そしてこの大金とともに常に持ち歩いていたのが、デジカメとビデオカメラです。医療支援活動のようすや、チェルノブイリ事故から長い年月の過ぎた現在のベラルーシの人々の暮らしぶり、街のようすを日本に帰ってから報告するため、訪問した先々で写真や映像を撮りました。なかでも検診風景の撮影は印象に残るものでした。自分が検診を受ける患者の立場だったら、写真なんて撮られたくないと思います。写真を撮っても大丈夫という了承をもらっていても、自分が病気かもしれないと不安を抱える患者さんにカメラを向けるのには正直うしろめたい気がしました。でもベラルーシの人々のために日本で集められた募金がある、こういった医療支援活動で役立てられているということを伝えるためにも、やっぱり撮らないといけないしなあという、何ともいえない複雑な思いでした。

ベラルーシの人々は今、チェルノブイリ事故に対してどんな気持ちを抱いているのだろう。日本での日々の淡々とした事務作業に追われる中ではあまり深く考えることはなかったのですが、実際にベラルーシを訪れて、少なくとも彼らの中では、「チェルノブイリ」はまだ終わっていないのだと感じました。そんな彼らと今後協力しながら支援活動を継続していきたい、これからも毎日の事務作業にこつこつと取り組んでいきたいと思えます。

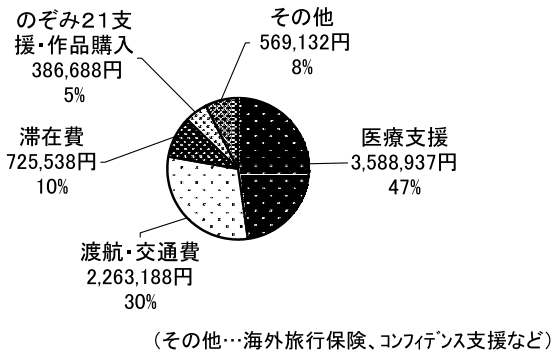
遠い存在であり、チェルノブイリ原発事故で被災した国という、何となく暗いイメージを抱いていました。しかしそのイメージは、今の仕事にかかわるようになって段々と変化していきました。写真や映像を通して見るベラルーシの風景はともきれいで、人々の表情もいきいきとしていました。目を重ねるごとに私の中で「ベラルーシに行ってみたいなあ」という想いは強くなっていきました。そんなわけで、今回のプレストでの検診に事務局から参加すると決まったときはとても嬉しかったのですが、正直かなり不安でした。ちゃんと事務的な仕事を果たすことができるのだろうかという心配があったからです。この「事務的な仕事」というのは、ベラルーシでの仕事だけではなく、それ以前の色々な手続きも含まれます。「ベラルーシにおける甲状腺ガン検診」といって、多くの人がまず頭に思い描く人物像は実際に検診を行う医療専門家だと思えます。事務局員である私の役割は、検診活動がスムーズに行える環境づくりに努めるという、いわば裏方の仕事です。そこで

# 第5回ブレスト検診を無事に終えて

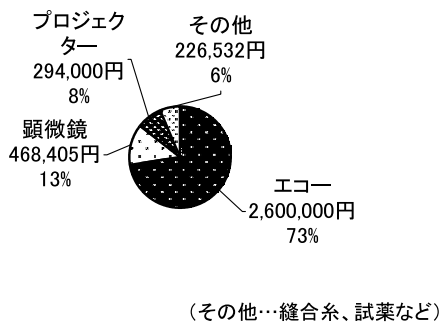
## ～ 事務局からの財政報告 ～

吉本 美貴 (チェルノブイリ支援運動・九州 事務局長)

### 検診支出内訳 (総額 7,533,483円)



### 医療支援費内訳 (合計3,588,937円)



この度の「ブレストにおける第5回検診」も、参加メンバーからの報告にもあるように多くの成果を残して無事に終了することができました。会員の皆さまをはじめとしまして、多くの関係団体・個人・業者の皆さまのご寄付、ご協力に深く感謝申し上げます。

ここで無事に終了した検診の見えないところで起こっていた出来事について、皆さまにご報告したいと思います。実は、ごく順調にベラルーシへの支援事業を行っているように見えるチェルノブイリ支援運動・九州も、この2年くらいは相当な資金難に陥っています。この度の検診も、運営・事務局メンバーの間で何度「やっぱり検診は中止」という話が出たことか。資金の減少は経過する時間とともに薄れていく人々の関心の表れでもあり

ます。今年4月に事故から「20年」という節目を迎える今だからこそ、これからも必要な支援を継続して現地へ届けていきたいという気持ちを含めて、現在の財政事情をお伝えさせていただきます。

夏の調査団を送り終えた時点で口座と現金の合計残高は100万円あまり。収入は年々減少傾向にあります。予想以上に厳しい状況でした。そして、検診の予算は600万円。どうやってこのプロジェクトをやっていたらいいものかと、いつにも増して暗く感じる倉庫(事務所)で矢野代表と頭を抱えました。1番妥当と思われる簡単な方法、「今回の検診は見送ろう」という案も頭をよぎりましたが、ベラルーシで検診団を待つ人々のことや被災者をもとに支えてくれる会員さんの

の気持ちを考えると、簡単にはあきらめられない。いよいよ無理だと確定するまでは、実施する方向で進めることになりました。

表向きは航空券の手配、ビザの申請、支援物資の発

注・税関手続きを着々と進めながらも、一方の頭の中では、このペースでいくと何日後の残高はいくらで、いつまでだったら物資の注文や航空券をキャンセルできるか、最終的に事業実施をあきらめるならどのタイミングか、ということ計算してました。事務局として状況を見極めて冷静に判断すればよいと考えても、これだけ大規模で多くの人の気持ちがかかっているプロジェクトを中止の可能性を抱えつつ進めていくのは、正直辛いのがありました。

このように追い込まれた状況のなかで、助成金交付確定後に「ありがとうございます。それで振り込みはいつですか?」と、こんなぶしつけな質問に「ころよく対応してください」さった株式会社カタログハウスと新潟県国際交流協会、支援物資の無償提供や値引き、支払い時期の相談に応じてくださった成和産業株式会社と株式会社日立メデイコ、武藤化学薬品株式会社、株式会社三啓、同じく渡航費の支払い時期の相談に応じてくださったアイランドツアーセンター、そして各担当者さまへ、この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

各機関、業者の方々のあたたかい対応に感謝するとともに、「チェルノブイリ支援運動・九州」という団体がこんなにも信頼を得ているのだという事に気が付きました。この信頼は当然短期間で築けるものではなく、これまでの実績の積み重ねであり、それを今後

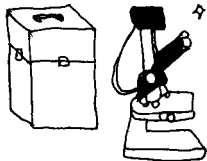
## 今回検診に届けた医療支援物資内訳



エコー式  
¥2,600,000

医学再教育  
センターへ

高価なものですが、早期発見には不可欠。待望の支援物資！



デジタルカメラ付の  
顕微鏡  
¥468,405

フレスト州立  
内分泌診療所へ  
念願の2台目の顕微鏡の  
導入です。



プロジェクター  
¥294,000

ミニスク市  
10番病院へ

医学研修、教育の場でも  
活用されます。



その他 試薬、  
縫合糸、注射針、  
シリンジ、消耗品など  
医薬品や医療機器  
¥226,532

汚染州、ミニスクの  
それぞれの医療機関へ  
少量の物資が継続支援の  
大きなものとなります。

もつなげることへの責任も感じます。

またこの頃、ちょうどチャリティヘアカットの準備を並行して進めていました。検診の手続きだけでも慌しい時期に大掛かりなイベントをすることに最初は躊躇しましたが、やってよかったと思います。運営・事務局メンバーともに資金調達の中で頭がいっぱいでとりつかれたように目が「￥」マークになりかけていましたが、このイベントのために集まってくれた人たちと接する中で、チェルノブイリ支援運動・九州が担う別の大

事な役割について思い出すことができました。もちろんお金を集めて被災地へ支

援を届けることは1番の目的ですが、皆さまのあたたかい気持ちも同時にベラルーシへ届けるために、そして20年が経過する今、チェルノブイリが風化されないよう社会に、特に事故のことを知らない若い世代に伝えるためにも私たちは活動していきたいと思っています。

ちよつとつらい報告になりましたが、これが今の実情です。こうしたことをお伝えしたことで、不快に思われる方がい

ましたらごめんなさい。

今後も限られた資金で最大限の効果を出せる支援を行えるように、運営メンバーや関係者たちと知恵を出し合ってやり繰りしてまいります。もちろん、会員の皆さまからも運営や活動内容についてご意見やアドバイスをいただけるとうれしいです。少しでも多くの人々の笑顔を目指して、これからもチェルノブイリ支援運動・九州とお付き合いたいだけますようよろしくお願い申し上げます。

## 編集後記

チェルノブイリ通信の66号いかがでしたでしょうか。ベラルーシでの検診の報告を中心に伝えしておりますが、今回の通信では、この8年間、会員の皆様とともに取り組んできたベラルーシでの甲状腺ガン検診の充実した様子を表す言葉が多々あります。特に9ページに掲載されておりますアルツール医師のインタビューでは、すでにアルツール医師自身が日本の医師から学んだ技術を6名の医師に教え、現地での検診に役立っているというコメントがあります。さらにはこの検診に参加した日本の若い医学生が示す高い関心(6ページ参照)

もこれから検診を続けていくうえでとても大切なことで、検診システムとともに、国境や世代を越えた人のつながりを私たちは築き得たと言っていると思います。今回の通信を通して、会員の皆様はじめ今日まで検診を支えて下さったすべての人々と、この達成の喜びを分かち合いたいと思います。

こうして検診活動を普及させていくうえで必要なシステムや人のつながりが構築され、これからさらにベラルーシに甲状腺ガン検診が広まっていく、と書きたいところですが、しかし…。そのためには資金が必要となります。

今回の通信では、事務局長の吉本さんに取って、現在のチェルノブイリ支援運動・九州の財政事情を書いてもらいました。その内容が示す通り、原発事故から20年が過ぎ、資金の確保が難しい状態になっています。が、また20年です。アルツール医師によれば、チェルノブイリの被害の影響はこれから100年続くとのこと。ベラルーシの人々の心には、チェルノブイリという重荷がいつまでも残り、身体の不調を感じる度に「チェルノブイリ」という言葉がその原因として思い浮かぶそうです。

そうした不安を取り除く支援が、ベラルーシでの検診活動に他なりません。甲状腺の異常を早期に発見することの必要性はもちろん、信頼できる医師からの「大丈夫です。問題ありません」という言葉は、大きな安心をもたらします。

私たちは、ベラルーシのプレストという「点」においては、検診システムを構築しました。これからは、その「点」を広げていけるよう、これからもベラルーシでの甲状腺ガン検診に取り組んでいきたいと思っておりますので、今後ともご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

チェルノブイリ支援運動・九州代表 矢野 宏和



# たくさんの募金を

## ありがとうございました

(敬称略・順不同)

大園広子 福本勅子 吉田千佳子 西山千代乃 松崎光子  
 富永隆史 壬生伸子 中村由紀 中村壮香 深田俊江  
 めぐみ保育園職員一同 関根涼子 蝶名林えい子 岸川美  
 好 長濱文 森永紀代子 村上和代 伊藤都司治 丸山く  
 るみ 島田まゆみ 三上錬子 綱脇牧子 譜久原由香 内  
 田怜子 得能美樹 箱田裕司 上里恵子 庄籠道子 白石  
 文昭 里見照子 北野溥 中村貴義 金山涼子 荒木潔枝  
 松尾由美 江口淳子 深堀ミチ子 河口友子 松下京  
 八坂民子 岩森久美 坪井秀雄 有賀淳子 丸山和成 石  
 橋啓子 渡辺真志子 日置美穂子 園田千恵子 藪陽子  
 本田裕子 ステイブ・サボッタ 椋島一郎 山中陽子  
 江越知佳子 稲吉清子 野村文子 井上裕子 井上政子  
 志村信子 稲田照子 財津悠子 林昌子 牟田美幸 渋谷  
 裕子 坪川裕子 植村仁美 木下るみ 狩野浪子 栗尾千  
 恵子 山内悦子 和仁幸子 野村伸子 小田久美子 遠藤  
 礼子 沢田愛子 福井寿雄 中村幸枝 キープ森のようち  
 えん♪ グリーンコープ長崎(峯和子) 久富海 永江之子  
 前田祐子 大庭由美子 大園広子 尾辻泉 榎本みつ枝  
 グループ・イーハトーヴ 田代いずみ 長谷裕子 佐藤  
 一司・一江 力武恵子 前田・中西・沖 サトウ矯正歯科  
 クリニック 水車むら農園 アイランドツアーズセンター  
 泉の鯉 宮本カズコ 森本真希 福本智子 白木ゆかり  
 天賀京子 森郁子 小出トシエ 松井巳美 堀之内真吾  
 柳樂翼 グリーンコープ生活協同組合おおい 力丸邦子  
 菊地順子 仲宗根明美 ほこあぼこ 桑山道子 松本弘  
 子 三宅哲子 伊藤綾 秋山佐智子 小島輝己 高山幸子  
 渡辺妙子 内田ケサエ 堀晶子 松本幸美 木村みさ子  
 須崎里仁 泉やよい 武田芳子 桑原千鶴子 吉村啓  
 杉谷邦子 大木正人 山田正巳 川崎巳代治 川崎幸子  
 引田良子 加藤篤子 山田美佐子 和田菜莉恵 長棟かお

る 援助修道会 馬橋修道院 内村直子 山口郁代 本田  
 美穂子 門司三智子 チェルノブイリ友の会 岡野祐子  
 野中孝子 原口敏子 松尾智恵子 樋水カツ子 山本真帆  
 落石久子 曾田敬子 谷村牧子 緒方貴穂 平山淳子  
 岡田薫 筑豊互助会 宮西いづみ 亀井廣子 澤田和子  
 吉川貴子 ふれあいハウストマト館

(2005年9月1日〜12月31日までに募金をして下さった方、ならびに、「のぞみ21」民芸品、チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶の購入を通じて活動を支援して下さいました方です。お名前を紹介することをご許可いただいた方のみ掲載しています。)

### 募金内訳

30000円コース	406,000円(134件)
50000円コース	204,000円(41件)
100000円コース	420,000円(38件)
「のぞみ21」カンパ	47,124円(15件)
その他カンパ	590,640円(120件)
合計	1667,764円

★株式会社カタログハウスより、350万円の活動支援募金をいただきました。

★「プレストにおける第5回検診」には、「通販生活」読者の皆様より、エコー、顕微鏡の購入費および、医療専門家2名の派遣費、雪だるま2号維持費として、376万4300円のカンパを、財団法人新潟県国際交流協会「新潟国際協力ふれあい基金」より、医療器材購入費として50万円の助成金をいただきました。

また、成和産業株式会社、株式会社日立メディコ、武藤化学薬品株式会社、株式会社三啓より、検診機器・試薬の調達、輸出にあたり、多大なご支援、ご協力をいただきました。さらに、医療検診団の派遣にあたり、荒木勤学長をはじめ、学校法人日本医科大学の皆様には多大なご理解、ご協力をいただきました。

### 募金者からのメッセージ 一部抜粋

● 少ですが、尊い働きに参加できて幸せです。● 気持ちばかりですが、運動にお使いください。● 毎日美味しいコーヒーをいただいで、少しでも支援できるのしたら嬉しいですよ。(のぞみ21のしおりが) 思った以上にかわいくて、いいねい、大きくて!! 感激です。● はじめの協力です。お役に立てば幸いです。● 通信を見てすぐにカンパをすると良いと思いつつ、実行がうまくゆきません。品物だと無理なくできますかね。● 「継続は力なり」。がんばって下さい。● この手紙が届く毎に、私も(ベラルーシへ)行ってみたいと思うんですよ。がんばってください。● ベラルーシに夢を届けてください。ありがとうございます。● 困っている人のために役立てて下さい。● マトリョーシカありがとうございます。手作りのいい味をたのしんでいます。放射能被爆の後遺症に負けないでがんばってください。● プルサーマルゲキタイ! がんばって下さい。● マトリョーシカとてもかわいかったです。のぞみ21がずっと続きますように。● 私はこの(チェルノブイリ支援) 紅茶が大好きで、朝たっぷり飲みます。● あらためて支援の必要性をかんじました。● 信頼される支援がこれからも継続できますように願っています。● のぞみ21の手作りの品を手にしたら、チェルノブイリがとても身近に感じられました。大切に使用させていただきます。● (のぞみ21の) キーホルダーがかわいくて娘たちが喜んでます。これからも制作がんばって下さい。● 子供たちに夢と未来を。● 子供たちの笑顔につながりますように! ● 我が子のために、続けます。● チェルノブイリの子どもの痛みを常々共有しています。● ささやかですが支援を続けていきます。● 出来るところで出来る事を出来るだけお手伝いします。● 良い年になりますように、お年玉です。● チェルノブイリ20年で風化させたくない! ● チェルノブイリ被災者の方々の金快を、心よりお祈り致しております。